

信 毎 俳 壇 今 井 聖 選

釣瓶井戸 趣味嗜食注連飾る

(南相木村) 猿谷 秀

おろしたる歯ブラシ硬し初日さす

(須坂市) 東郷賀代子

くろがねの鍋に目鳴く寒夜かな

(長野市) 荻原 宏祐

初雪に一麥の村一夜にて

(大町市) 原田 勝

老犬の尿の長さや冬田道

(大町市) 丸山めぐみ

日向ぼこ地軸ほどよく傾けり

(飯山市) 田中 琢雄

土よせの畝の合掌敷眠る

(須坂市) 富田 孝弘

山裾の雪の原越え教壇へ

(松本市) 伊藤 和夫

遠き日の炬燵話や猫もあて

(長野市) 清水美佐子

長響を新聞で巻く開戦日

(中野市) 石田 一石

佳作

北窓を塞ぐ手にあり灯油臭

(佐久市) 西田 和彦

野辺の道くろりと暗き冬の雪

(中野市) 小林かつ子

選評

一句目、日常の生活を支えてくれている存在に注連を飾って新年を迎える。美しい風習である。二句目、年初に歯ブラシも換える。口に入れたときの感触が違ふ。それもまた年の初めの感慨のひとつ。

三句目、「くろがねの鍋」に風土の歴史と生活の証を見る。その中に貝という「食」の実感が渡る。四句目、雪国では初雪がどか雪に変わることもある。一夜にして雪の世界が始まる。

神野 紗希 選

年新た瀬音清しき千曲川

(中野市) 芋川 菊水

白息の太き鼻孔よ飼ひ葉食む

(大桑村) 木戸口信幸

底冷えや壺に花なき大広間

(佐久市) 佐藤 勝子

貂の鳴く夜でこぼこの月球儀

(小諸市) 加藤 陽介

花枝月させばまた酔ひはじむ

(長野市) 南郷 修二

門燈の点れば枇杷の花淡し

(長野市) 松本 宏要

冬霧の深きに鳥の声を聞く

(飯田市) 太石 昭重

開戦日黙し酌み合う戦中派

(長野市) 青木 武明

芯の軸ひねりて挽ぎる林檎かな

(上田市) 竹内 重美

親子熊も仰ぐや今宵の星空を

(飯山市) 小野沢竹次

佳作

たらのしらこつてふれんちくるらー?

(中野市) 風間 一乃

黒姫のぼつんとせる冬の星

(長野市) 斎藤 俊幸

選評

一句目、常より清らかな千曲川の瀬音も、新年にはなお清々しく響く。風土と生きる頼もしさ。二句目、飼ひ葉を食べる牛馬の顔面にクローズアップ。鼻の穴から太く吐き出される息の白さに、厳寒を

生きる命の逞しさを見た。三句目、花のない寂しさが底冷えをさらに深める。大広間の沈黙の迫力。四句目、貂の声に誘われ意識は夜の闇へ、さらに宇宙へ。月面の凹凸に世界の手触りが立ち上がる。

坊城 俊樹 選

湯たんぽを抱いて眠れば船の夢

(佐久市) 高橋衣里子

朽ちゆける獣骨包み山眠る

(大桑村) 木戸口信幸

宿坊の厩は遠し大囃

(箕輪町) 向山 政俊

話しつつゆつくり歩む冬ぬくし

(飯綱町) 坂井 寿男

それぞれが命輝く冬木の芽

(佐久市) 栗林 貞夫

凍滝や立ち現はれる羅漢像

(長野市) 飯森 泉

かいつぶり浮いて横見てすぐ潜る

(箕輪町) 松沢 陸

返り花音より長く祈る母

(須坂市) 丸山 英子

風花や川の渡しありし跡

(上田市) 竹内 重美

軍艦の朽ちてアラレ冬の海

(長野市) 武田 芳子

佳作

しるるるや女人高野の男旅

(長野市) 坂口 智弘

ままならぬとはさておきおでん酒

(佐久市) 西田 和彦

選評

一句目、湯たんぽは揺らすと「タブン タボン」と波打つような音がする。確かにそれは船に乗っている夢を見るに相違ない。二句目、冬になり山は眠るように枯れていく。そこで死んで朽ちていく

の骨を抱くように。それもまた自然の摂理かもしれぬ。三句目、えてして宿坊の厩は外にあったりする。それでは身体が冷え切ってしまう。大囃もむべなるかな。湯冷めにはくれぐれも用心。